

『紅樓夢』と『源氏物語』の色 彩表現について（続）

斎藤喜代子

On the Expressions of Color Between *A Dream of Red Mansions* and *The Tale of Genji*

Saitou Kiyoko

Abstract: *A Dream of Red Mansions* is a Chinese literary classic, while *The Tale of Genji* is a Japanese literary classic. The two great literary classics have great comparability, and the similarities and differences between them have always been concerned by Chinese and Japanese scholars. This article will focus on the daily clothing of Jia Baoyu and Genji, the protagonists of the two works, and investigate the color change, color choice and color preference of the two protagonists' clothing through the analysis principle of chromatics, as well as the different characteristics of Japanese and Chinese literature reflected by them, so as to provide some clues for the analysis of the internal development law of Chinese and Japanese literature.

Key words: *A Dream of Red Mansions*; *The Tale of Genji*; Color; Clothing

（前号に続く）

夕顔の巻に、○ありしながら、うち臥したりつるさま、うちかはし給へりしが、我が紅の御衣、着られたりつるなど、と。^[14]

これは夕顔の遺骸に別れを告げた源氏が朝霧の中を二條に帰る道々、いまさつき見届けた夕顔の姿をしのんでいる部分である。遺骸には昨夜ともに打懸け交えた自分の紅の衣がそのまま懸けられていた。その紅の衣の色は「すごき」庵の、ほのかな灯明の中に置かれた骸の上にあったがゆえに、源氏には凄絶な色として映ったはずである。が、いまその紅の衣

の色はしげき涙、しとどな朝露、更なる朝霧に濡れてすでに凄き色を失い、濃染の紅もうるんでしまっている。原色が生のままの發色を見せることはきわめて稀であるといつてよいであろう。

紅葉賀の巻に、○帯は中將のなりけり。「わが御直衣よりは、色深し」と見給ふに、はた袖もなかりけり。ど。^[15]

これは源氏が典侍との密かごとを頭中將に見破られた日の翌朝、典侍より源氏のもとに届けられた帯の色についての描寫である。その帯は夕べの戀の無法者、頭中將のものであった。というのは自分

の直衣の色よりも濃い色だったからである。帯は直衣と同じ布で仕立てる。官位の低い者は濃い色の直衣を着る。源氏のそれは、これまでの例を挙げれば櫻がさね・櫻の御直衣・櫻の唐の綺の御直衣・うすき御直衣、と薄い色である。従って源氏の帯の色はまた直衣と同じ薄い色である。ここでは帯の色目を通して源氏の服色の薄さを間接的にうかがうことができる。

賢木の巻に、○薄二藍なる帯の、御衣にまっはれて引き出でられたるを、みつけ給ひて「怪し」と思すに、と。^[16]

これは右大臣の娘である尚侍のもとに忍んで行った夜、暁ごろ俄かに雷鳴がとどろいて帰るに帰れず、そのまま尚侍の部屋に留まっていたところへ右大臣が訪れ、娘の着物に裾に見なれぬ男物の帯がからまっているのを見咎めた場面である。「薄二藍」とは薄い青と赤の中間色で、くすん青みがかかった紫色をいう。帯が薄二藍であれば直衣の色は当然また薄二藍である。ここでもまた帯の色目を通して間接的に源氏の服色をうかがうができるが、青でもなく、赤でもなく、二色の重ねによって生れる全く別種の、くすんだ青紫は涼しい色である。季は夏である。薄二藍は夏によく着られる色である。

野分の巻に、○御直衣を、花文綾を、このごろ摘み出だしたる花して、はかなく染め出で給へる、いと、あらまほしき色したり。と。^[17]

これは原氏が花散里のもとに風の見舞いに出かけたときの描寫であるが、野分の翌朝とあって冬衣の用意にとりかかっているところであった。大勢の女房たち

がさまざまな色の布をひき散らかして裁物をしていた。その中に自分のためにと用意された直衣の色は「花文綾」つまり花模様のある綾を、このごろ摘んできた花でさらりと染め上げたものであった。

「この頃摘み出だしたる花」とは何の花だろうか。いずれにしても秋の野分の頃に應わしい服色に染め上げるための花である。服色は季節の色と密着している。しかもそれが「はかなく」染め上げられているという点に注意したい。はかなく染め上ったその色を源氏は「いとあらまほしき色」として満足している。源氏の服色の大概を示す語としてこの「はかなし」の語は大切であると思う。

幻の巻に、○みづからの御直衣も、色は世の常なれど、ことさらにやっして、無紋をたてまつれり。と。^[18]

これは紫の上が世を去ってからすでに七か月を経た春のある一日、源氏が二條の院で匂宮とともに花の庭を眺めながら亡き紫の上を忍んでいる場面である。喪の服の期間三か月、源氏はすでに平常服に着替えている。直衣のその色は「世の常」というから普通の二藍、つまりくすんだ青紫色である。しかしその布地は無紋とある。紋様はを織り出したはなやかなものではないというのである。喪の服の期間をとうに越えたのにことさらに地味な装いをしていることによって、紫の上に対する追慕の情の深さが知られるが、出家を考える源氏はその装いの上からも次第にはなやかな色がぬけていくようにはいである。このときの源氏の無紋の装束は、春深き花の眺めの中に置かれて却って色に染められているように静かな美しさである。

葵の巻に、○にばめる御衣たてまつれるも、夢の心地して、「われさきだゝましかば、ふかくぞ、染め給はまし」と、思すさへ、と。^[19]

これは葵の巻の上の死による喪服の色である。にばめる御衣とは、鈍色つまり薄墨色である。下文に源氏が「限りあれば薄墨衣あさけれど一」といって念誦している通りである。常とは異り薄墨色の喪服をつけてしのびやかに経文を唱える源氏の姿は却っていっそうに優雅である。作者はそのありさまを「いとゝなまめかしさまさりて」と表現している。喪の衣の色が源氏の君の光りを抑えて、常の衣の色以上に優雅さを加えている。「にばめる」という語はまた「はかなし」の語とともに源氏の服色における大切な語であると思う。

また葵の巻に、○これは、いますこし、こまやかなる夏の御直衣に紅のつやゝかなる、ひき重ねてやつれ給へるしも、見ても、あかぬ心地ぞする。と。^[20]

これは時雨もよいの晩秋、源氏が霜枯れの前栽をもの悲しく見つめているところへ頭中將の訪いを受けたときの模様である。源氏の衣裳は中將のそれと比べるともう少し濃い色である。もう少し濃い色とは上文に「中將の君、鈍色の直衣・指貫うすらかに衣がへして」とあるによってそれは中將のよりももう少し濃い薄墨色である。葵の上の法事もすでに過ぎたことによって頭中將(このときは三位になっている)は薄い色のものに衣替えして「いとをゝしう、あざやかに、心はづかしきさまして」と、すっきりと凛々しい姿で登場している。それにひきかえ源氏は衣替えもせず、濃いめの薄墨色の直衣

に、紅のつやつやした下襲という配色である。下に引きかさねたつややかなる紅が、濃いめの薄墨色に抑えられていっそう美しく、時雨の時季というのになお夏の直衣であることがまたいっそうに侘しい。『源氏物語』における衣の色は何よりも自然のけはいと密接な関係にあるといえよう。

また葵の巻に、○無紋のうへの御衣に、鈍色の御した襲、纓、巻き給へるやつれ姿、花やかなる御よそひよりも、なまめかしさ、まさり給へり。と。^[21]

これ源氏が葵の上の死後、久しぶりに桐壺院と藤壺の宮のもとに出向いたとき模様である。すべてまだ服喪中の姿である。紋様なしの袍に鈍色(薄墨色)の下襲である。しかも巻き纓の冠である。纓を巻くのは服喪の時である。冠は袍と同じく無紋である。ひどく面やつれした源氏が、發散せぬ喪服の色目の衣をまとう姿は「はなやかなる御よそひよりも、なまめかしさ、まさり給へり」とある。却って優美であるというのである。いかに地味な色目の衣を着てもなまめかしくあるというのは、源氏がひとえに光るの君であるがゆえで、生れながらの血の貴さゆえの内なる輝きがすべての色調の下地として作用する結果である。

賢木の巻に、○藤の御衣に、やつれ給へるにつけても、限りなく清らに、心苦しげなり。と。^[22]

これは桐壺院の崩御による喪の姿である。源氏は「藤の御衣」をまとうている。藤の御衣とは藤衣のことである。もとは葛の蔓の繊維で織った粗末な布のことであったが、のち轉じて喪服を指すようになった。そうしたきわめて粗末な衣

をまとうて父なる院の法事を行なっている姿が、また「限りなく清ら」であるというのである。藤衣という、色もなにもない衣が源氏の身に着けられるとたちまちにして「限りなき色」に變る、いや、色を生み出してしまふ。

それもまたたぐいまれなる光る君であればこそである。色のないところに色以上の色をみるという一つの美意識はまた注意すべきことかと思う。

朝顔の巻に、○鈍たる御衣どもなれど、色あひ・かさなり好ましく、なかなか見えて、と。^[23]

これは源氏が朝顔のもとに通うときの描寫である。この日のいでたちは薄墨色（藤壺の喪の期間なので喪服を着ている）の装束だが、「色あひ・かさなり好まし」とある。重ね着のために鈍色の濃淡が作り出され、はなやかな色彩よりも却って美しいというのである。しかもそのいでたちが紫の上には「雪の光りに、いみじく艶なる御姿」としてうつつている。鈍色は本來冴えぬ色である。それが源氏の姿態を包んで純白の雪の輝きの中に置かれると異様な煌めきを發して、むしろなまめかしさをさへ感じさせる。『源氏物語』の配色は自然の風物を巧みに取り込んで表現されているといえよう。

三、兩貴公子の衣裳くらべ

以上の觀察からここに兩貴公子の服色に關することがらを對比してみると、先ず第一にとり上げられるのは色彩語の問題であると思う。これについては、賈寶玉の服色が大紅、紅、銀紅、大紅猩、絳、猩猩、五彩、石青、青、松花色、錦、秋番色、綠、油綠、荔色、彈

墨、玉色と、「紅色」を基本色としてそこに原色多彩の色彩世界を作り出しているのに対して、光源氏の服色は櫻、葡萄色、白、紫苑色、薄紅色、青鈍、薄縹色、紅、薄二藍、二藍、鈍色と、「薄紅」「薄青」もしくはその襲ね合せの色を基調とした間色淡彩の色彩世界を作り出しているということが出来る。もちろん光源氏の服色に全く原色は用いられていないということとはできない。たとえば「乙女の巻」朱雀院行幸の場がそれである。○人々、みな、青色に、さくら襲を着給ふ。帝は、赤色の御衣たてまつれり。召ありて、太政おとど、まゐり給ふ。おなじ赤色を着たまへればいよいよ一つものとかゞやきて、見えまがはせ給ふ。と。ここにいう「赤色」が禁色の一つで、臣下には使用を許されなかった色であることはいまでもないが、それ黄櫨（はげ）と茜で染めた赤味のある黄色、いわゆる黄櫨染の色を指すものであれば、それは賈寶玉のあの「紅」とは全く異なるわけであって原色とはいえないが、しかし「赤」という原色語が生で使用されている稀な例である。これを除いては光源氏の服色にはほとんど原色語は用いられていないといつてよいであろう。

次にとり上げられるのは配色の問題である。これについては、賈寶玉の衣裳にこれについては、賈寶玉の衣裳における色の取り合せ、組み合せ方が原色を平面的・並列的に配して、その競り合いによってそれぞれの色が有する本來の色目を最大限に發色させて、そこに絢爛豪華な多彩美を形成しているのに対して、光源氏のそれは、色と色との襲ねによって雙方

の色が熟れ合い、そこに「清ら」「うすき」「はかなき」「にばめる」といった語によって表現される、發色を抑制した優美典雅な淡彩美を形成しているといえる。

しかも賈寶玉は原色多彩の衣裳の上になお金・金八寶・銀・珠と、金銀珠玉を配して目眩めきばかりの輝きを發散させているのに對して、光源氏はその薄色淡彩の衣裳に配しているものは何かといえば、それは視覺の世界からは離れたところの薰き物の“香”である。「たきしめさうそき給ひて」(薄雲)「いみじく匂ひ満ちて、顔にもくゆりかゝる心地するに」(帚木)「いとかうばしくうち匂ひに」(空蟬)「おし拭ひ給へる袖の匂ひも、いと、所せきで薰りみちたるに」(夕顔)のごとくであるが、香は王朝文學における衣裳の問題を考える場合決してゆるがせにできぬ要素である。ただでさへ薄色淡彩の衣の色は、燻べられることによっていっそう幽けく、いっそう朦朧たる色となってしまう。

『源氏物語』の主人公は「桐壺」の卷よりしてすでに「世になく清らなる、玉のをのこ御子」であり、「にほはしきは、譬へん方なく美しげなるを、世の人「光る君、ときこゆ。」という存在である。いわゆる“光源氏”なのである。にもかかわらず彼の衣裳の色彩はその名とはうらはらに、何とも鈍くくすんで、賈寶玉の燦然として輝くそれと非常に對照的である。もちろん彼を光源氏と稱するゆえんがただその相貌のみならず内より輝く類い稀なる資質に因ることはいうまでもないが、ここに服色に関する限りにおいては彼は明らかに“光る君”ではな

いということになる。そうした意味においては賈寶玉こそまさに“光る公子”であるということができよう。

次にとり上げられるのは服色と自然風物との關係である。このことについてはこれまたすでに各事例において言及したことではあるが、光源氏の服飾表現はつねに季節の色と密着していたということである。ここにそれを抽出してみると、○夕映えに櫻の直衣(薄雲)○うす闇に櫻の直衣、葡萄染の下襲(花宴)○秋の夕暮に紫苑の袍(須磨)○雪に白き御衣(若紫上)○夏の夜に薄二藍の直衣(賢木)○野分の朝に、はかなく染めた直衣(野分)○霜枯れに鈍色直衣(葵)○雪に鈍色の御(朝顔)衣というように、その服色を季節の色調に非常によく調和させている。いや、時に服色に季節を配しているかもしれない。がそれはまた『源氏物語』がいかにも自然描寫に關心が拂われているかということでもあろう。

これに比して『紅樓夢』はどうか。雨の日には雨の装い、雪の日には雪に装いがもちろんある。が宝玉の服色は雨だからとて、雪だからとて、“紅”から離れることはない。自然の色に融合するどころかときには自然の色に反発する。いやむしろこれを無視するといった方が適切であるかもしれない。例えば第八回に、寶玉が薛家から帰るとき霰が降っているので斗蓬をかぶって出る場面があるが、そこでは外の霰に関するところは一切述べられていない。そのとき寶玉のかぶった猩猩緋の毡呢の笠が霰の中にどう映じたか、『源氏物語』ではおそらく大きな関心であろうはずのそれが全く缺落し、作者の関心はもっぱら對話に

注がれているようで、どのように送り出すか、どのように送り出されるかのやりとりに忙しく、そうこうしてあつというまに部屋に帰ってしまう。

また第四十五回には、賈寶が雨の中を黛玉のもとに出かける場面がある。賈寶は簑笠をつけている。しかし衣装の色は依然として變らない。紅綾子の上衣、緑の帯、油緑の地に模様を散らした褲子、金糸でぬいとりした靴下、蝴蝶落花のぬいとりをした短靴である。雨は寶玉の副色に何ら影響を及ぼしてはいない。

また五十二回には、寶玉が王子騰の誕生祝いに外向く場面がある。その日は雪もよいの日であった。寶玉は天馬皮を裏につけた羅紗の上衣を着込んでいる。しかし衣裳の色はこれまた常と變らない。猩猩緋に金糸・五色を配した褂子である。雨であろうと、雪であろうと寶玉の服色は一向に變らない。寶玉の服色は季節の色とほとんど無関係といってもよいであろう。

私はさきに賈寶玉と光源氏の服色を通して『紅樓夢』と『源氏物語』の色彩表現を比較し、それを兩國文學の特性を探る上の一の手がかりともしたいと述べた。ここにそれを概括し何というべきか、一言でいうならばそれは兩國文學の間には色彩に対する美意識の違いがあるということである。『源氏物語』が、というよりは日本文学では概ね原色の生の色を直に置いて見せるのを嫌い、むしろ色を幾層にも重ね、色が色を秘しながら次第に深くなっていく、その熟れた深みのある色を美しいとする感覚が支配的であるということである。

生の色よりは熟れた色を、原色よりは

閒色を、發散よりは抑制を、色の廣がりよりは深まりを、という方向に色彩に對する美意識が働くということである。

もちろん時代によって色彩に對する美意識は一様ではない。たとえば萬葉の時代には極彩色が最も美しいとされ、また現代においても生の色彩が歓迎される部分がある。しかし色彩に對する日本人の美意識の概ねは上述のごとくで

あると思う。日本人の感性はそれほど騒々しくなく、それほど露出的ではない。むしろ沈靜と濕潤とを好むのが一般的ではないかと思う。これに對して『紅樓夢』はどうか、ということになると、これと凡そ對照的なものがそこに現わされる。何よりもまずその色彩は鮮烈であり、濃厚であり、多分に顯示的である。従って色に濕潤さを缺く。中國文學において「色」とは本來そういう際立って鮮明なものであらねばならないのかもしれない。

この對比を兩主人公の代表的な服色語を以て示すならばそれは「紅」と「櫻」ということになるであろう。『紅樓夢』の主人公賈寶玉の服色は文字通り紅に染め上げられていた。しかし『源氏物語』の主人公光源氏の服色は『紫の物語』と呼ぶとも必ずしも紫に染まっていた。光源氏の代表的な服色は櫻であった。しかしここで何よりも大事なことはその櫻が閒色であるという點である。薄くほのかな、はかなき閒色であるという點である。そしてこの時代に最も尊貴の色とされた紫こそ、實はその閒色の最たるものであるという點である。閒色こそは王朝の色であり、最も美しいと感覺された色であったということができ

ろう。色彩世界における紅と櫻、原色と間色というこの対比は時代による色の變遷ということを考慮に入れなければならないとしても、そのまま中國文學と日本文學という対比に置きかえることができるかもしれない。

「紫の朱を奪うを惡む」とは孔子の言である。^[24] 中国においては原色を正統色としてこれを貴び、あいまな色を退ける。比して日本においては上代の冠位・服色の制度以來、その間色の紫を最も高貴の色とした。「花も絲も物紙もす、なにもなにも、むらさきなるものはめでたくこそあれ」と、王朝の才女紫に狂った。^[25]

中國文學の原色的あり、日本文學の間色的あるその隔りは、一體何に基因するものだろうか。

四、結語

私はここに色彩に対する美意識の優劣、高低を論じているのではない。同じ東洋の文化圏に属する両国の文学に現れた色彩に対する美意識が、このように両極をなすことに興味を覚えるということである。その隔たりは何に基因する

のか、吉田精一氏は日本文学を育む土壌について「外國の侵畧をかってこうむらず、海に圍まれ、季節による自然の變化に恵まれた島國は、温和・繊細・現實

的な性情と、自然に対する細かな感覺とを養った。文學でもこうした環境

による影響が大きい。」と指摘する。^[26]

また森本哲郎氏はアフリカを機上に眺めたとき、沙漠の芸術の色調がこれ以外にはありえないということを実感した衝激を「まるで黄疸にでもかかったのではないかと疑ったほどにそこは黄色だった。それは石のユーロッパに対する土のアフリカの色であった。」と述懐している。^[27]そこにはモンsoon型日本人の色彩感覺とはるかに隔った色の世界が厳然として存在していたのである。

中國のあの大地の色と、日本のこの島の色と、そこに生み出される色彩の様相はたしかに密着した関係にあるであろう。あるいはまた、それぞれの民族の有する歴史の色が、その民族の色彩感覺に大きく作用しているとも考えることも出来るであろう。

しかしともかく『紅樓夢』における色彩が鮮明にして燦然と輝き、それぞれの色が色として強烈自己主張をして他に譲らぬ對して、『源氏物語』のそれが色と色とがまつわりつき、お互いに吸収し合って果てしなく朦朧とした色彩世界を生み出している、いわば鮮明と朦朧の現象は、そのまま両国文学の持ち合わせる特性の一端を物語っているように思われる。

注釈:

[14] 豊譯は「紅衣」と。林譯は「紅色衣裳」と。

[15] 豊譯は「比他自己的常禮服深」と。林譯は「較自己所用者色深」と。

[16] 豊譯は「淡紫紅色」と。林譯は「淡藍灰色」と。

[17] 豊譯は「用這時節摘取的竹葉的汁水淡淡的染成、色彩非常雅觀」と。林譯は「用

新近擷取的月草花染出来淡彩花紋、看來頗爲美觀」と。

[18] 豊譯は「顔色雖是尋常的」と。林譯は「平常の色調」と。

[19] 豊譯は「淺黑色喪服」と。林譯は「暗色之喪服」と。

[20] 豊譯は「比中將顔色稍深、裏面襯着鮮紅的襯衣」と。林譯は「他穿的的是的淺墨色的夏衣、下面的紅裳襯出燦然的光彩」と。

[21] 「他身穿無紋大禮服、内襯淡墨色襯袍」と。林譯は「他穿着素色外袍、灰色的衣」と。

[22] 豊譯は「葛布的喪服」と。林譯は「喪服」と。

[23] 豊譯は「灰色的喪服」と。林譯は「喪服的顔色凝重」と。

[24] 『論語』陽貨篇。

[25] 「枕草子』八八段。

[26] 萬有百科大辭典第一卷「文學」（小學館）。

[27] 大岡信篇『日本の色』（朝日選書）。

参考文献

○『源氏物語評釋』玉上琢彌著（角川書店）。

○『平安朝の文學と色彩』伊原昭著（中公新書）。

（勤務先：二松学舎大学名誉教授）

※原文は二松学舎大学『二松』誌（第4期1990年）に掲載。